

比較文学研究

特輯 説話の流伝と変容

巻頭言: Patience, patience川本 皓嗣 (1)

「小鳥の唄」の發祥.....小堀桂一郎 (3)

フランスに蘇った蟬丸——映画『めぐり逢う朝』
と日本文化.....大島 眞木 (22)

伝説の文体——森鷗外訳「聖ジュリアン」について.....菅原 克也 (50)

狐の業と女の性と——『蘆屋道満大内鑑』を
中心にして.....和田 正美 (65)

河を渡す者——フロベール『聖ジュリアン伝』と
日本の仏教説話.....君野 隆久 (76)

ドイツ資料から見た大黒屋光太夫
——アッシュ・コレクションの背景.....伊藤 恵子 (88)

「性的生活」の誕生——『キタ・セクスアリス』
と自然主義再考.....ヨコタ村上孝之 (118)

明治日本の知識人・文学者の朝鮮認識
——小池正直の『鷄林医事』を中心に.....崔 在喆 (130)

回想 台湾時代の島田謹二先生.....神田 孝夫 (149)

島田先生とハーンのことなど.....仙北谷晃一 (162)

島田先生の思い出.....私市 保彦 (164)

島田先生から学んだもの.....佐々木昭夫 (167)

[書 評]

『洋楽導入者の軌跡
——日本近代洋楽史序説』(中村理平).....平高 典子 (170)

『異都憧憬 日本人のパリ』(今橋映子).....稲賀 繁美 (174)

『論集『日本書紀』「神代」』(神野志隆光編).....朴 一昊 (178)

[Le Rond-Point]

「すでにして」考古田島洋介 (185)

「日本文化論」とフェミニズムの関係小谷野 敦 (187)

金禹昌氏講演会傍聴記西原 大輔 (196)

佐伯彰一先生「日本人と神道」講演会を聞いて傳 澤玲 (199)

中国比較文学会第四回大会参加報告西楨 偉 (202)

島田の風物詩体験の旅朴 一昊 (208)

『叢書・比較文学比較文化』出版記念会報告花方 寿行 (212)

成惠卿助手を送る言葉平川 節子 (214)

島田謹二博士著作年表補遺 (217)

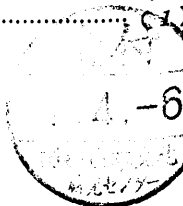
小堀桂一郎教授著作目録 (236)

第九回金素雲賞発表 (257)

外国語要約.....

65

東大比較文学會



今橋映子 著

『異都憧憬 日本人のパリ』

(柏書房、一九九三年)

稲賀 繁 美

一

一九八〇年代後半の文学、文化史研究の動向を踏まえて一冊書かれておくべき書物が刊行された。日本人にとってのパリ、という主題については、古くは淵辺得蔵『欧行日記』あたりから最近の太田博昭『パリ症候群』に至るまで、もう三十年以上のあいだ、この国の各々の世代がその世代ならではの、回答ではないにせよ、省察を残してきた。日本の近代を考える場合、ニューヨークでも北京でもロンドンでもなく、なぜか特異な思索の場を提供してきたこの町と、そこに旅し、なぜか住みつき損ない、憧憬を抱きつつ拒絶されることのみ多かつたこの国の知識人たち。その足跡を正面から扱った研究が、フランスかぶれの批評家的独善とも実証一本槍の国文学研究とも別の次元で、学術博士号取得論文としてこの国の学術機関に提出され、この国の人文系の業績としては珍しく、きちんと批判的体裁を保った形で刊行されたことの歴史的意義を、まず確認し、

著者とともに喜びたい。

主題の選択はまことに正道である。先人の主要な業績を踏まえず、その質量とも圧倒的な成果を難無く消化し、屈する事なくさらに未開拓の領野に歩を進めている。必須とはいえない困難なこの事業を模範的に実現した能力は圧倒的だ。挙げるべき「主要先行業績」は二つある。一方に久米邦武『米欧回覧実記』そのほかに結実した幕末明治の知識人の洋行体験を、『大君の使節』をはじめとする著作で研究し、それを明治文化史の、そして日本文学における特異な突出点として視野に収め、さらには大正日本文化史を、欧米との交流の比較研究を通じて、都市論の視点から探った芳賀徹。また他方では『和魂洋才の系譜』をはじめとする著作で、明治知識人たちの経験した『西欧の衝撃と日本』の腑分けに多大な成果をあげてきた平川祐弘。このふたりの教授陣が退官を迎えようとする大学院研究課程で、その指導を批判的に集大成した、おそらく最後の成果の一つが、ここに世に問われている。

ここにまず挙げられたふたりの研究者の名前を見ただけで、一種の党派性を感じられる読者もあるろう。だが国内での派閥争いの次元を越えて、「外国人のパリ」という問題設定に、「アメリカ人のパリ」、「中国人のパリ」などと並んで日本からの貢献をきちんと一章書き加えるだけの力量ある若い研究者が育ったことを、なによりもまず言いたい。その実力のほどは、一九九一年の国際比較文学会東京大会での著者の明晰なるフランス語での口頭発表によっても示されたところだ。そこでは本書最終章ともあい補い、金子光晴のパリ体験がジョージ・オーウェル、ブラッサイ、ヘンリー・ミラーらの三〇年代パリ体験と共鳴し増幅されて、外国人ならではの「どん底

体験」が照射され、普遍的なメッセージへと昇華される。よそ者ならではの「生活と意見」の交差のうちにパリの汚辱を明るみに出す著者の趣向。そこに宿る無国籍都市の実相は、けっして宗主国フランスの学界への外国から学問的貢献といった植民地主義的な図式には還元されない。フランスの日本文学研究の付属物でもなければ、この国でしか通用しない特殊で内に閉じた国文学研究の補助手段としての比較文学研究でもない、第三の領域。本来最も必要とされるはずなのに、既存の学界では一番評価されにくいこの領域。この定かならぬ領域へと躊躇なく歩を進める著者の力量と、健全な、あるいはあまりに健全すぎる、怖いもの知らずの優等生的探求精神とを、まず率直に認めておきたい。

二

金子光晴論に先立ち、その前提となる本書の結構を批判的に眺めておこう。本書は第一部「ボヘミア文学のパリ」、第二部「憧憬のゆくえ——近代日本人作家のパリ体験」とに分けられる。すでに比較文学の領域として市民権を得ている第二部の作家群研究に自足せず、美術史の領域へも果敢に測鉛を降ろしたあたり、著者のたゆまぬ探求心と確かな目配りが如実に感じられる。また巻末の初出一覧を見る限り、本書第一部は第二部より後になって姿を整えたものらしい。第二部の舞台を歴史的に前以て復元し直しておくこの周到な準備作業のお陰で、日本人のパリ体験と原型としてのボヘミアン生活との乖離もより鮮明となるだろう。さらにその第一部執筆も、研究の展開とともに後半から前半へと遡るように進行了ものらしい。

関心の赴くまま調査の手を自在に延ばしながら、迷路に迷い込むこともなく安定した足取りで広大な道程を踏破し、さて成果の報告となるや、これまでの道程を一挙に逆転させ、読者に理解しやすい章立てに編成し直して破綻なき道筋をつける。それは実にしたたかな手腕である。

ボヘミアン生活はそれまでの職人から藝術家へと脱皮しつつあった明治の画家の留学に典型的に現れ、東京美術学校でのパンカラの原点となったが、その震源地と覚しき岩村透の『巴里の美術学生』の種本発掘(第一部第三章一四一頁、一五一一二頁)という、美術史研究の領域でも未到の地道な——しかしボヘミアン生活の内実に接近する実り多い——作業から出発した著者は、これに続いて岩村が学んだアカデミー・ジュリアンの実態に迫る。ここは岩村や中村不折、荻原守衛、斎藤与里、津田青楓、安井曾太郎、満谷国四郎、とりわけ鹿子木孟郎といった日本人のみならず、ジョージ・ビドル、小説家に転向したロバート・ウィリアム・チェインバーズといったアメリカ人を含め、留学外国人画学生たちのたまり場となっていた(同、第二章)。この分野には日本でも美術史家による研究がいくつか存在するが(一二七頁補註)、アメリカ合衆国では留学画家たちの証言を組織的に収集しているというのに、日本は美術史家の層が薄いためもあってか、文学研究の場合と比べて、立ち遅れがひどく目立つ(八六頁)。なお日本人による手記には「ほとんどめぼしいものはない」とする著者の見解(一二八頁)とは違って、日本人特有の日記癖なくしては、アカデミーでの教程などがこれほど細かに記録されることもなかったのではないかと。むしろ日本人研究者がよく参照するミルナーの著書(一九四頁註17)などが、二次史料に

一四)からブッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』(一八九六)に至るボヘミア生活の理想化を辿る才筆。さらに大矢タカヤス氏の論考(八二頁)を敷衍しつつ、ボヘミア生活像の変貌ぶりを、主人公ロドルフ(ロドルフォ)の恋人ミミの *femme fatale* から *femme fragile* への変貌に読み取るあたり、著者のフランス文学研究者としての先行業績への目配り、概論綜合の力量も、十二分に発揮されている。

三

以上を踏まえて第二部を論評する段だが、すでに所定の紙面が尽きた。正面から著者の作家・作品論(には還元できぬ独特の視座)を批判する仕事は近代文学研究者にお任せするとして、本書全体の共鳴ぶりをボエームの変奏として一聴しておこう。著者はボエームがブルジョワの見果てぬ夢となる位相に荷風(二一六頁)を置き、そこに黒田清輝、藤島武二ら「公式のボエーム」が日本でまがりなりにも実現されてしまった後のボエームの不可能性(一九〇、二〇七頁)への諦念の具現を見据える。さらに、いわば岩村から強いられた外遊によって、かえって日本という「手ざわり」を自分のうちに見いだした光太郎(二二六頁)の触覚恐怖——教会建築柱頭の剣り型に宿る肉感とその幻想としての愛撫(二四〇—五〇頁)。そこに憧憬から了解不能な現実との対峙を経て、パリを「乖離」し、母国回帰するというタイポロジー(二五五頁註36)とは違って、むしろ自分の内なる他者性を契機とした精神の危機というクリステヴァの提案(二二頁)を投射してみてもはどうだろう。また栗本勳雲の観察に反応し、フローベールやテーヌの文明論の誤訳を触媒することで

頼って少なからぬ幼稚な誤謬を含んでいることのみ、一言注意しておきたい。

さて、当時はまだ女性に門戸を開いていなかった美術学校に比べて、女子のための教室も併設されたアカデミー・ジュリアンは、世紀末を彩った天折の女流画家マリー・バシキルツェフの面才揺籃の場所でもあった。おりから刊行されたコスニエの研究(一三〇頁註30)に目ざとく注目した著者は、この女流画家の生涯を日本で紹介する機会をも得ている。こうして最近流行の、というより、女性美術史家にとつては「政治的な正しさ」の自己証明として必須の研究課題となった「女流画家研究」にも先鞭をつけた筆者は、さらに遡って、このロシア貴族の娘を自由な生活へと開眼させる契機となった、あのボヘミアン生活の歴史を、全体の総論として展開する(第一章)。

当然仏文畑できちんとした整理がなされていくべきこの話題で、入手できた日本語の文献はわずかに阿部良雄氏の業績など数点にとどまるらしい。シャンフルーリの小説『犬ころ』のモデルが放浪の版画家として文字どおりボエームたる一生を貫いたロドルフ・プレスダンであったことに言及がない(五四頁)など、紙面の都合で削除されたらしい情報に未練がないわけではない。著者には『ボヘミアン生活』で新書一冊を書きおろすだけの蓄積が十分にありのだから。オクターヴ・タッセルの『画室の一隅』(一八四五)の画家のチョッキの赤にテオフィール・ゴーチエの「赤胴着」を想起するなど(四九頁)、従来ワイズバグら美術史畑における写実主義研究者が指摘していない連想まで逞しくする推論の魅力。またアンリ・ミュルジュールの小説『ボヘミアン生活の情景』(一八四五(二六二—七〇頁)逆説的にも生活者としてパリの庭園空間に広小路に通ずる「生きられる空間」を的確に見いだしながら、結局『エトランゼエ』の「異邦人の旅愁」という主題ゆえにかえってそのパリ体験を隠蔽してしまった作家藤村(二九一頁)。その「時代を先駆ける批評眼」(二八五頁)ある都市論の水面下に明治初年の「幻のパリ計画」の挫折(二二頁)を透視することも可能だろう。またパリの公共空間に馴染めぬ藤村にも「しばらく私は旅の身を忘れて居た」(二二三、二二八頁)ほどの至福を体験させた、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの聖女サント・ジュヌヴィエヴの生涯を描いたパントオンの壁画に、藤村の絵画にたいする寡黙さの所以を問う論(これには異論もあるが省略する)。これを「身体的自由、時間の無束縛」こそ「美術家の生命」(一七〇頁)と見る岩村の説に重ねて読み直してはどうか。

そしてこの岩村の「美術と富」説の行き着くところには「薩摩治郎八であるか金子光晴でなくては叶わぬ」境地しかないとする(三二二頁註4参照)、ジョージ・オーウェルのいう「体面をとりつくろった貧乏」(二八三頁)の悲惨を見ればこそ金子の「哲学をもった乞食の精神」(三八八頁)が獲得される道理も飲み込める。由良君美がジョン・キーツを下敷きに「消極能力」と呼んだこの能力(三六三頁註30)ゆえに、詩人は「漂泊する無国籍者」ならではの居直りで、「汚辱に満ちた生活にこそ美しい花も咲く」と心得る。この「破れかぶれの冷靜さ」にとつて、パリはもはや憧憬の対象どころか「徒花」ではない。フアシズム台頭、スペイン内戦といった政治的緊張のなかで「政治的動物」の正統派の意見など平然と無視して『北回歸線』を執筆したミラーに対し、政治的立場はどうて

い折り合わない『カタロニア讃歌』の著者オーウエルが示した透徹した理解。かの有名なエッセイ「鯨の中で」の描くこうした奇妙な無風状態を、著者は「世界の惨事」に直面しても、それを新聞紙面の校正係という労働を通じて中和し、消化して、完全な免疫をつくってしまったというミラーの自己治療体験談に巧みにも引き寄せ、そうした精神風土の上に改めて金子の哲学的乞食精神の在りかを浮き彫りにする。もはや現実介入による世界の藝術化の夢はむろん、現実から逃避した藝術体験による魂の救いすら信じはしないままに、「ねむり」と時の移ろいに——それを虚偽と知りつつも——感溺をもつて陶然とする詩人。そのほとんど戦慄的な姿が、論文も末尾の一世紀にわたる歴史の堆積の醸す腐臭の中、三〇年代、パリの底辺に蠢く共時的な闇の底から、初公開の水彩作品とともに鮮やかに浮かび上がってくる。